



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 入江幸男教授 功績調書   |
| Author(s)    |   |
| Citation     | メタフュシカ. 2019, 50  |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/73761">https://hdl.handle.net/11094/73761</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 入江幸男教授 功績調書

入江幸男教授は、1976年3月大阪大学文学部を卒業後、1978年3月大阪大学大学院文学研究科博士前期課程（哲学哲学史）修了、1983年3月同後期課程を単位修得退学し、同年4月大阪大学文学部助手に就任、1991年4月大阪樟蔭女子大学学芸学部講師、1993年4月同助教授を経て、1994年4月大阪大学文学部助教授に着任した。1999年4月大阪大学大学院文学研究科助教授に配置換えとなり、2003年10月同教授に昇任、以後文学研究科の発展に尽力し、2019年3月31日限りで定年退職するものである。また、この間、パッサウ大学（ドイツ連邦共和国）客員研究員（2005年4月から7月まで）、ピツツバーグ大学（アメリカ合衆国）客員研究員（2005年8月から12月まで、2015年10月から2016年1月まで）を務めた。

同教授は、長年に亘ってカント、フィヒテ、ヘーゲルに代表される18世紀、19世紀のいわゆるドイツ観念論を対象とした古典研究と、クワイン、ディヴィドソン、ブランダムに代表される分析哲学を対象とした現代哲学研究に取り組み、著書及び論文を多数国内外で公刊し、国内外の学会や研究会で数多くの口頭発表を行ってきた。単著『ドイツ観念論の実践哲学研究』（弘文堂、2001年）では、カント、フィヒテ、ヘーゲルの自由論の展開を考察し、カントの中に自由概念そのもののアポリアを指摘し、フィヒテの道徳論とヘーゲルの人倫性論の中にそのアポリアの克服の可能性を探り、この業績で大阪大学より博士（文学）の学位を取得した。同教授の研究活動を特徴づけるのは、ドイツ観念論研究と並行して、分析哲学の研究が行われてきたことである。わが国におけるドイツ観念論研究者たちは、従来、ドイツ観念論のみを研究対象とし、ひたすら原典の文献研究だけを行ってきている。他方、分析哲学の研究者たちも同様に、英米圏の議論をフォローすることだけに努めている。ところが、ドイツではアーペルやハーバーマスらが分析哲学の知見を積極的に取り入れ、アメリカではマクダウェルやブランダムといったところがドイツ観念論のアイディアを自由に駆使し、それぞれ独自の哲学を展開している。同教授の研究スタイルは、いわばこうしたドイツやアメリカでは着々と地歩を固め生産的な議論を展開しつつある動向に、ほぼリアルタイムで応答してきたものである。具体的には、ドイツ観念論の蓄積された知を前提としつつ、分析哲学のアプローチを用いて問答及び問答関係をテーマ化し、哲学的意味論、言語行為論、共有知論、感情論、物語論、社会問題論、ボランティア論などの研究に対して新しい視点を提供した。2007年から4期にわたり継続的に行ってきた科学研究費研究（「分析哲学とフィヒテ哲学」「意味の全体論とドイツ観念論」「分析哲学とドイツ観念論の連携およびそのグローバルな意味」「心の哲学に対するドイツ観念論からの貢献」）においても、首尾一貫してドイツ観念論と分析哲学との架橋が目指されてきた。

教育にも力を注ぎ、多くの学生を育て、多くの優秀な研究者を輩出したが、いずれも文献研究に終始するのではなく、常にアクチュアルな問題意識を持ち続ける教育研究者である。また、講義ノートや研究成果の論文などを、早くから自身のHPに公開することに努めてきた。

学外においては、日本哲学会委員、同評議員、同理事、同編集委員、日本フィヒテ協会会长、同常任委員、日本ヘーゲル学会編集委員、関西哲学会委員、国際ボランティア学会理事、同編集

委員などの役員を長く務め、学会の発展に大きく寄与した。

学内においては、学生生活委員会委員等を務め、文学研究科においては副研究科長や教育支援室長などを歴任し、大学の管理運営に尽力した。また性差別問題委員会の立ち上げや、全学のセクシュアル・ハラスメント対策のガイドライン作成に尽力した。EU が運営する ERASMUS MUNDUS Master Programme (Euroculture Programme) に、域外パートナー校として文学研究科が参加する道筋をつけるうえで大きな役割を演じ、ドイツ学術交流会の ISAP を用いてハイデルベルク大学日本学研究所と文学研究科が教育・研究に関して交流を開始し、パートナーシップを軌道に乗せるうえで多大な貢献を果たした。さらに、日独 6 大学による大学間国際ネットワークである HeKKSaGOn の運営にも積極的にかかわった。

以上のように同教授は、研究、教育、運営業務に大きな成果を上げており、ここに、大学院文学研究科教授会はその功績をたたえ、本学名誉教授候補者として推薦するものである。